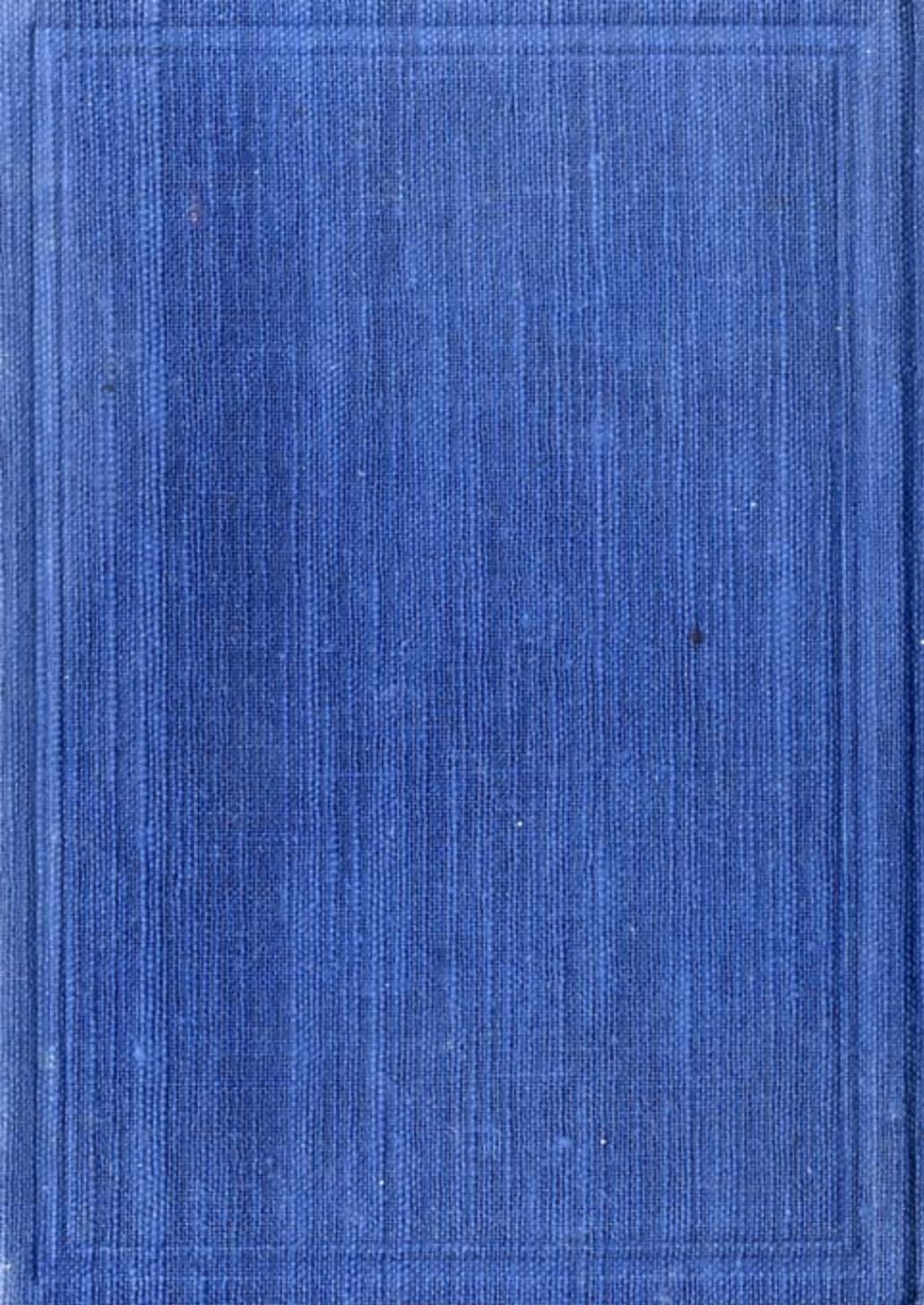


澗春一句集

深林

琅玕洞刊行

1957



深
林

瀧
春
一

一九五七年
琅玕洞刊行

深 林

空山不見人
但聞入語響
返景入深林
復照青苔上

—王維

昭和二六年

十一月、十二月と中の作品のみ。
これは何処、これは彼処でと、
旬の出来た時と所をいつまで
もはつきりと記憶してゐる。

はたらく体臭満ちて寒夜の活字の壁

八ツ手の花玲瓏蝶は死絶えしか

八ツ手の花こぼして蠅の舌なめづり

黒白のさやけき葉むら冬椿

子どもたち蝌蚪のごとくに日向ぼこ

師走日曜母の炬燵を奪ひしが

枯野に下りし鷺に一羽の友もなし

寒肥の杓ねもごろに枯野を擦る

冬耕の深き条痕没り日流る

藁塚や身よりも心あたたまる

冬青き草は冷やりと日向ぼこ

肥船の溜りも空の藍張りつめ

枯園も夕日に濡れしとき逢ひぬ

昭和二十七年

全身不随のロイマチスで百日
余り床に就いた。
肉身の愛と、厚き友情と、生
きることの尊さを知った。

風雪に訪ひ来る絆初句会

面影ひとつ消しもあへずにスキー穿く

墓原の雪を掴みて力湧く

寒明けの墓域眞ッ赤な花を見る

佛の花はべたついた色春また来る

浪費の悔と雪の泥濘いつまでも

野菜作り止めた畝から三色堇

春めきて夕べは茜さす障子

雪解の岩洗はれてすぐ陽炎^{かぎろ}へり

岩群の雪まづ消えて雪解川

雪解の岩冷やかにまた暖かに

雪解川忙しく波をたたみくる

ネツカチーフに包む土筆のさむき色

土筆枯色日輪水に炎なす

春山の木々みなかしぐ海の方

春の海暮れそめてより日を湛ふ

よろこび狂ふ蟻続々と穴を出で

蟻穴を出でて直ちに曳き来るもの

花どきの花火百姓町にひらく

夏みかん冷やりと重し春炬燵

霧荒び赤き芽立ちのただよへる

こどもの日も母の日も独り新樹の蔭

緑蔭に脱ぎたる靴の人臭き

若楓幹の金鉄の硬さこ触れ

病床の薔薇 十六句

——腎臓炎より急性ロイマチスとなり全身不随——

剪りて間なき薔薇と思へり炎だつ

人等若し薔薇もて病褥を飾りて呉れし

枕辺にかしづく薔薇は豪華に過ぐ

病臭の薔薇に隠れてうけこたへ

薔薇は瓶にあふる病臭知られじと

病褥に語り薔薇もて顔を蔽ふ

人去りてより薔薇は薔薇色に渦巻ける

ひしめきて薔薇悉くわれに向く

独りをたのしむときの薔薇の香いきいきと

卓の薔薇斜はすにあふぎてすぐ疲る

病む心つめたく炎えて薔薇に対ふ

白き薔薇数十輪と数へ疲れ果つ

胸に金策美しき薔薇われを捨てず

薔薇に誓ふこの身癒えたらば強く生きむ

きれぎれの眠りや遂に薔薇崩る

食餌療法

薔薇咲く丘の塩欲る牛を夢に見る

醜骸を負はされし妻の梅雨地獄

雷雨の底螢火ほどのいのち覚む

暁^{あけ}のひかり日々恋ひ梅雨の長かりし

百合を見つつ虚ろの思惟を満たすべし

わが病む夏の蒲団を妻は仕立てをり

素直に病む心ミルクとパンとトマト

わが肉をかくも啖ひし梅雨の餓鬼

悲しきは勤めの鞆黥と化しぬ

昼寝覚むる病者と犬が顔見合はず

働く人の帰る道なり水を打つ

よちよちと病者の歩み灯蛾を踏む

雑草の花よ病みての日々迅し

心音の正しとおもふ蟬遠し

原爆記念日黒き憤怒を嚙みくだす

原爆記念日空の奥がの蒼くつめたし

原爆記念日罪無き者一人もある無し

癒ゆる望み暑に堪ふる汗はなつかしや

楓一樹犬の昼寝の地を冷やす

月に覚め遠蝸に明けそめぬ

八ッ手の葉雨を溜めゐて秋立つや

妻の針に糸通しやりぬ秋立つ朝

新涼や脳裡の職場たのしげに

みづいろの朝顔にひびく機械音

恢復期床屋まで妻の日傘に入る

水打つ母物売りを断りきれず

朝毎に足慣れて朝は秋の風

蟲の音の増ゆる夜風に身をいとふ

快復期青柿いまは落ちずなりぬ

足慣らす露の道さへ心急せく

雑草は吾を阻みて花ざかり

燈下親し今はおほかた子の書を借り

母よりも弱き足もて墓参り

墓までの道冷やかに石敷かる

血族が額づきねがふ石の墓に

祖父母の名聞伽そそぐときかがやけり

墓碑の下にあるべき人の骨を数ふ

墓石に額づけり神を信ぜずして

社員クラブ起き出てめづる鯛雲

鴟の後苛だつ海の音を聞く

秋晝や芝生に沈む女の腰

案山子の顔髭を刎ねても愚直な眼

豊かな穂波案山子いづれも貧寒と

運動会のはての君が代わびしく起る

残る蟲三方海は壁なせり

国寶佛寒し十円紙幣置く

焼鳥焼酎露西亜文学に育くまる

靴底と石ころ道の噛みあふ冬

冬の漁夫堕ちて遊覧船を漕ぐ

友の職場の机に語る日短き

寒夜咳く世に在りし父の如く咳く

植木職人冬木びしびし剪りとばす

植木職人焚火にいまもバツトを喫ふ

昭和二十八年

健康を取り戻すと、俳句の友達と度々旅行して、以前よりも自然の美しさを詠ふことに幸福を感じるやうになった。

枯野をはしりはしりロマンスカー帰る

ストーブに背骨一本寒く立てり

入社試験へ吾が子アメリカの古外套

炊事婦に老婆雇はれ日脚伸ぶ

マフラーに吾が子らは憂き大人の顔

煙草喫ふ火にて故なく芝焼けり

ア
パ
ー
ト
の
か
ぼ
そ
き
欄
も
雪
を
積
む

埼玉療養所にて

療
養
所
発
終
バ
ス
や
春
三
日
月

谷川温泉 五句

雪
割
り
の
き
の
ふ
に
了
へ
て
春
の
雪

雪割＝村中総出にて道路の根雪を掻くこと

熊笹は光炎となりて春日出づ

落葉松の芽ぶく吐息につつまれぬ

空に溶くる雪嶺木々の花黄なり

奔流や春山の闇脱がれむと

葉山二句

海は五月家の縮図に人やすらぐ

ヒトデが摺む五月の海はひびきなし

五月の沼漂ふ死魚は子を孕む

ビヤホール異国語荒く南風吹けり

霊園の除草夫老の顔やすき

額 咲いて 女社長に 寧日あり

若きをみなの日傘に入りて こだはらず

ギター鳴らし了りて 女瓜きざむ

千葉県香取郡多古町 二句

青田風青き葡萄の棚撓ふ

丘は蝸青田に沈む多古の町

颱風の叫喚蟲は音をね変へず

颱風やひた濡れて梳く吾が髪あり

一灯忌療友といふ語のあはれ

秋ひと日ひとの家族に温めらる

榛名湖 五句

はたと静寂秋湖に沈む己が影

山湖の波落葉の匂ひ寄せてくる

秋一夜まこと山湖の波を聞かず

秋湖のめざめ女ざぶざぶ衣きぬ濯ぐ

湖畔のたつき朝は落葉と芥焼く

初火鉢此の日端坐の己れあり

婚約す二人に訪はれ初火鉢

枯萱のぬくきに没し世を想ふ

岨に遇ふ炭負女何に羞ぢらふや

炭
負
女
眞
白
き
喉
の
汗
ぬ
ぐ
へ
り

昭和二十九年

此の年、信州諏訪の尖石遺蹟
で、太古の土器を見たときの
強い感銘が、いつまでも心に
尾を曳いてゐる。

額に汗して枯野に遊ぶ安息日

大根誕生つぎつぎ土に寝かされて

弾初の母七十の声の艶

寒鮒釣る老爺の余生われにありや

貧乏植木屋歳暮にくれし福寿草

大人ばかりの元日みんな起き出でず

ロマンスグレーなどと男の初鏡

基地の初富士黒人兵の寡黙にて

林枯れ白き一塊の不二沈む

寒鯉の彩冴えざえと水を見ざる

吾が家の犬寒鶏にまた飯を奪とられ

うからのひりし寒肥梅に柿にやる

極寒や実の生らぬ椎瘤だらけ

風雪の門に歡喜の犬が迎ふ

長野県諏訪郡豊平村にて 四句

雪明り太古の土器に人の貌

土偶の貌
眦裂けし男顔

土偶の貌
夢みる薄眼女顔

土偶を守る家の
うつばり雪霰

花
づ
く
り
霜
除
け
と
れ
ば
く
ら
し
の
花

畦
駈
け
る
犬
よ
耕
馬
は
放
た
れ
ず

畦
の
犬
田
搔
の
馬
を
目^ま
守^も
る
か
に

野の寂寥ひとつら一列花菜かがやけども

虎童子と良子の結婚を祝ひて

春装や第一日の山と海

心労の眼に春水の深く迅く

落花弾みはずみ流るる水迅し

春天へ松真つ直ぐに細り聳^たつ

哀しみに似て風の日の春惜む

松の幹重なり暗く四月尽

行く春や短く紅き松の蕊

ねむたくて雲雀曇りのまぶしさよ

青き踏み櫓の林に身を容るる

五月の幹の赤く整しき松林

どくだみの香のふんぷんと犬帰る

わが家にわが子の世帯青簾

一灯忌街の煤ふる彼が墓

香水や老いては死し人びと臭しとて

ビニール雨具べろべろ青田寒く見し

睡蓮や風雨の波に載る白さ

犬病みて人間と臥るカビの中

塩尻峠田川浦鉱泉 九句

山の湯に浮くは農夫の盆の顔

汗の身に泌みる素朴な湯の濁り

鉱泉の湯の花人の垢ならず

山の湯をうづむる萬華鮮烈に

青田の照り葉尖つんつん炎立ち

落葉松の土用芽溢れ風溢る

鬱蒼たる山にかぶさり葛咲けり

夏果てぬ山^{やま}草^{くさ}勁き硬きを敷く

からまつのしづく冷やりと風露草

帰京

東京暑し峡の送り火目を離れず

漬物に味噌汁熱く暑休無し

次々に子女の出勤蟬澄めり

夜濯ぎの裸形吾が家の娘たち

大群衆輸出見本の花火に酔ふ

一家の浮沈青柿なほも落ちころげ

水の秋ズボンの折り目垂直に

膳拵への母は肋に汗溜めて

秋風の行方や同じ樹を鳴らす

月の座の女性洋装の線整ただし

女の声はずむ月光張りつめて

五十路爽か弁当飯は自分で詰める

飯
啖ふ親子汗の胸板相對す

信州池の平にて白樺湖の遺跡発掘 三句

考古学者の白髪はみ出す霧のピケ帽

考古学者の老眼寒き破片に凝る

考古学者の友ら老いたり湖涸れたり

草虱靴下の脚透きとほる

草虱赤い飲み屋の灯に来ても

拜島・自然公園附近 五句

自然公園枯野を水が蛇行せり

ジェット機の飛び出す枯野書も霧らふ

冬河の明るく基地の街昏し

赤線基地ジャズ鳴らしても枯野は枯野

菓子買ふ枯野老婆が駄菓子搦み出す

炉に足を垂らし瞑り心放る

聖夜の髪共に白きは雪ならず

生ひ立ちの共に貧しく聖夜の友

異人に躓きて菓子を乞ひしはクリスマス

鋭
心
を
喚
び
覚
ま
さ
む
と
無
帽
の
冬

昭和三〇年

一週間のみちのくの旅は愉しかった。人間の世を批判し、現実に抵抗するよりも、下積みの人として、黙々と日を送る愚かな自分なのである。

房 総線 枯田 枯丘 淡^と紅^きいろに

丘に擁かれ青む 涸田も寒潮音

おもちゃの漁舟童画の彩の初漁旗

鴨川

岬は夕焼海坂に
凧はずみ出て

千倉より白浜へ

一月の麗ら
花畑花ざかり

金盞花冬咲く
丘に海愁ふ

海
潜^{かう}
く海女の身群れて初荷役

紺
紺
老若わかず初荷役

黒
髪を
つつむ
手拭初荷役

若き海女腰ゆるぎなく初荷役

老の海女掛声わか初荷役

信州諏訪

—五句—宮下本平君の暖流賞受賞祝宴に列席—

詩人にして農夫吹雪は天の楽

乾杯直ぐに雀の頭噛み砕く

雪解光「妊娠土偶」に欲情す

彷彿く人に凍る坂路一生涯

バス待つ友ら夕凍みの肩押しあへる

雛の顔生きるに憂ひなき眉目

雛の世も下人は薄き衣にて

雛にして履捧ぐるは老の役

春の遠富士使はるる身の五十路過ぐ

歪んだ屋根ぎつしり詰まる花曇

宮坂冬郎君の結婚を祝ひて

土偶の尻掌にして重くあたたかに

埼玉療養所にて 七句

療院の蕨といへど垣はあらし

蕨摘む百姓の子の荒々しき

病者よりも挙措鈍重に蕨摘む

ひとに譲る心遣ひや蕨摘む

蕨摘みて世苦忘る身は病者ならず

病むひとの摘みくれし蕨家づとに

療院の蕨摘む春も逝かむとす

鶴川村・桂郎居にて 七句

桐の花感傷滓として残る

屋根に一八老婆どつかと縁に腰

蒼古たる枝を隠さず柿若葉

陋巷に育ち草笛など鳴らず

筍を剥くや女房は小柄がよき

連衆に茶碗まちまち柿若葉

若葉かざす柿の木肌は茶碗の肌

ゴブラン織昏く琉金爛々と

瘦せ金魚喘ぎ十円玉沈む

尾を振りて鮒よりましな金魚群れ

吾の他に短夜を知る妻と母

曇り日の若竹の肌むしろ白し

みちのく旅吟 二十七句

山形附近

畦に腰下ろすやすらぎ米どころ

芍薬をかざす童女はこけしの髪

山寺・立石寺

ほととぎす山姥の口真つ赤に裂け

蟬塚の碑に凭り仰ぐ朴の花

仙台

炊煙や浅き夏川彼我隔つ

愛語聞く緑蔭城下町滅ぶ

平泉

伽羅の御所跡のしづかに早苗取

高館たかだてや北上川の行々子

涼風を踏まへ義経の八字髭

中尊寺秘仏

霊肉の具顕ぞ一字金輪きんりん佛

永遠の処女豊頬丹花の唇

真向へばみひらく慈眼あふげば閉づ

くびれ深き真白きかひな濡れたまふ

睡蓮沼

ほのぼのと残んの金に青葉の香

花 卷

馬 曳 く 杣 夏 暁 の 湯 町 通 り 抜 け

田 植 一 家 馬 も 尾 を 振 り 畦 に 待 つ

青 森 近 く

鰯 雲 映 る 植 田 も 北 の 涯

落葉松にエゾハルゼミの北の涯

浅虫

海峡の夕焼惜む美^{うま}し酒

金色堂

水芭蕉照り映え山の雪澄めり

水芭蕉葛川道に奔り出で

蝌蚪漆黒氷の如き水に抛り

落逞し荒蕪の土に打ち込む鍬

奥入瀬

阿修羅の流れ
朽の聖燭
寂として

瀧白くゆらめきの
ぼり音もなし

八方へ水狂奔す
花うつぎ

十和田

山の湖に津あり浦あり梅雨けふる

けふも勤め吊革の環のぬるりと汗

ゴム底のはみ出す靴と雲の峯

炎天の蝶の精根飛びつづけ

遠花火うつくしき言こと吾に告ぐ

裏窓の裸醜し又美し

夜濯ぎの夜毎勤労女性にして

凜漓たる汗の一灯忌なりけり

奥 蓼科 七句

嶺離る雲波だちて高原覚む

蝶 韌^{つよ}しはやあかつきの溪翔くる

炎ゆる緑仔細に見れば秋七草

松 蟲草馬臭のしるく馬憩ふ

高原やちりちりと刺す初秋の日

きりぎりす晩夏の地平炎え旺り

晩夏高原明るく暗く雲流る

葬列の吾や五十路の開衿シャツ

昔の友のころ稚し遠花火

蓑蟲が穿つ無数の穴の天そら

吾が家の消長今年最も柿豊年

柿は黄に照り顕れて数へ切れず

雨又風に戦く柿を思ひ寝る

朝は柿を讚へそれぞれ勤めに出づ

熟るる柿待つほどに子らは成長す

お人好しの一家なれども柿豊年

豊年の穂波寄すれど基地の柵

豊年祭風船玉を豪華に飛ばす

冬に入る豊年の地のあたたかさ

桐生・山光館にて

杣の斧赤子負ふごとし冬山へ

秋さくら山の日やがて谷に満つ

鶴川村・桂郎居 六句

生り年にあらで早くも冬木の柿

よき妻と母のみとりに冬麗ら

病む桂郎袖無し見れば河童の図

枕辺に小春の竹の影ささやく

蓼野菊君が子みたり三人にみちびかれ

穴まどひ追ふ子熊蜂捕へし子

藤田宏君結婚 二句

新郎の肩幅冬の空玲瓏

枯芝生く新婦の裳裾触れゆく刻

こころよくさむし日本の黄葉期

木枯に川が苛立つ木の無い街

師走句会毛糸編機の音絶えず

徹夜業霜を踏み出てはや忘る

小企業に停年なきや皆枯木

昭和 三 一 年

句会や吟行の作品が多くなつた。併し句を作る機会を与へられる句会や吟行を大切に思ふやうになつた。尙けど尙けど楽にならず、ただただ忙しいのである。

酷寒や日傭土工駈けゆく音

ひびわれし枯木の肌を日がつつむ

万才独りはや押売りの形相に

古稀の母寒夜声出して欠伸せり

雪搔人夫今は童子に異ならず

雪搔人夫運河へ雪崩つくりては

雪搔人夫コンクリ路は焚くものなし

故六川水声先生の『水声句集』上梓さる 三句

春雪に鶯鳴き老の尻からげ

高原の灯蛾も潜みて読書の灯

霜の華白紙に白き壺を描く

枯野いま亡るびの色の灰と黒

人を訪ひ四囲の枯野を直ぐ忘る

花作^{つくり}人卑猥なる語を吐き捨てに

室咲きの繚乱縛す荒筵

ラツシユの電車売られる花を担ぎ込む

草城逝く吾や不覺に水洩落す

体操の従順寒のホイッスル

きさらぎや華燭に近き人虔し

芹を摘み旅情の詩など懐ふ古さ

春の水砂にせせらぎ海へ入る

古畑を起す最初の夫婦の眉宇

地虫出づ詩の仲間にもボス跳梁

老朽詩人パンジー買へば顔かがやき

草萌えて波除けの波静かなり

散るさくら草除る老の位置変らず

畦道のひびわれすでに野の薄暑

藁鳩の宙ぶらりんや榛芽ぶく

古利根川にて

青春の「帰らざる河」か春惜む

若芝や憂愁夫人椅子にひとり

月の土地クイズで当る四月馬鹿

空林を彩るほどに檜若葉

暖流吟行にて
五句

鮪血まみれ玄能が氷叩き割る

風は初夏鮪の胴の朱の番号

活魚槽青竹夏の潮噴けり

鯨箱詰三和土を奔るホースの水

青果市場は森林の香の五月来る

薔薇展や美しきものに飽く疲れ

麥笛や明治唱歌の節ばかり

泥蟹や運河の底の泥に生き

泳ぐ足一対もてり海の蟹

冷房の冷氣張りつく腕を撫す

冷房やどの場も暗き悲劇にて

黒耀の眼の哀しげに兜虫

老いて硬き掌に爪たつる兜虫

わが手わが胸に冷めたく暑に堪ふる

炎天の色は冷めたし凌霄花

墨東奇譚も古典となりぬ水中花

遊園の機械人間を弄ぶ

瘦身清らに岩場はいつもトップ切る

ザイル一条一片の危俱もなし

山峡三日 十七句

——暖流俳句鍛錬会にて——

めつむれば昼の青田が残像に

青き薄明山百合二輪崖に覚む

鮮しきひかり満つるや蟬しぐれ

臥^ふ床^{しど}の女唱夏暁の鳥の音につつく

霧ふる峽焚木縞麗に家形に積む

峽も炎天花よりも蝶の彩さまさま

杣木積み了へてトラツク昼寝せり

稚魚成魚分たれて鱒はさびしからずや

宿の子の手花火峡の星低く

手花火の爆ぜては峽の闇震ふ

瀬音蟲の音のみかは峽にこもる声

秋の瀬や一塊の石に生きもの棲む

秋暑の瀬に濯ぎて肌惜みなく

洗濯や秋の水踏む白き素足

帰心ふと峡の秋雲淵を白め

脳裏に職場避暑といふには飽ッ気なし

滴りに濡れにぞ濡れて岩たばこ

後記

本句集は、「萱」「菜園」「常念」「瓦礫」に次ぐ第五句集に当る。

「瓦礫」以後、即ち昭和二十六年十一月から三十一年八月迄に発表した作品中、三百九十一句を自選・採録した。

今年の十月十五日は満五十五歳の誕生日である。自分の現在勤めてゐる会社は小企業なのではつきりしないが、大企業の会社なら停年といふ名で否応なしに離職することになる。勤労者としての生涯に一応の終止符が打たれる重大なるときである。

私のこの一と筋の俳句生涯も、ここで区切りをつけて見たいと云ふのがこの句集上梓の一つの理由である。併し句集を上梓するときは、次の新しき境地へ飛躍すべき、充分な力を自ら感ずるときでなければならぬと思つてゐる。

無論私の心には抱負がないわけではたい。現代文学の方向に生きようとする意欲から、伝統俳句の約束を破るいろいろの試みをしたが結局、若い時から志した、庶民の歌としての日常生活から取材した平明な句境に落ちつくやうである。平明と云つてもそれは表現上のことであつて、一句の底にあるものは、働く人間の歎びと共に苦しみや悩みや抵抗であることに変わりはない。

本句集の題名「深林」は、自然詩人王維の「返景深林二入ル」の詩句から得た。夕日の照り返しが山の林に射し込む明るさは、現在の私の句境のやうに思へるのである。

—昭和三十一年十月 記

昭和三十三年三月五日
昭和三十三年三月十日
印刷
發行

句集・深林

預価三二〇円

参百部限刊

著者

澁 春 一

発行者

楠 本 靈 吉

印刷者

萩 原 毅

発行所

限定
出版 琅 玕 洞

東京港区麻布笄町七九
電話・赤坂區七五六七
撥替・東京五六七三八

